

他者のためになると思うことで意欲は上昇するか： 仮想場面を用いた検討

徳岡 大・佐藤深雪・森田愛子

Does motivation improve when benefits to friends are expected?:
Investigation with a hypothetical situation

Masaru Tokuoka, Miyuki Sato, and Aiko Morita

The aim of this study was to investigate whether or not achievement behaviors were promoted if that behavior was also expected to be beneficial to friends. We used a vignette involving a part-time job situation. Participants were 106 university students. Participants who were instructed that any overtime they worked would help their friends' jobs worked longer than those who did not receive this instruction. In addition, we found work rate was related to specific personal traits. Work rate was positively correlated with sensitivity to rejection, and negatively correlated with individual-oriented motivation. These results suggest that expecting some benefit to friends increased achievement behaviors, although the amount of increase differed depending on personal traits.

キーワード：others-oriented motivation, self-oriented motivation, achievement behavior

Murray (1938) に端を発する達成動機に関する研究では、達成動機を、社会的・文化的に価値があるとされたものを成し遂げることを包括する概念として扱っている(堀野・森, 1991)。すなわち、達成動機には競争的な達成や社会的な評価を目指すことも含まれており、他者の影響により達成行動が促進されることも報告されている(e.g., Elliot & Harackiewicz, 1996; 伊藤, 2004)。他者の関わる達成動機の中には、“他者のため”という意識に支えられる動機づけがある。例えば、スポーツ選手が“ファンの期待に応えるためにプレイする”ことを公言することは“他者のため”という気持ちに基づいた動機づけといえるだろう(伊藤, 2004)。

“他者のため”という意識に支えられる動機づけは、他者志向的動機として研究されてきた。他者志向的動機とは、自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続けるといった意欲の姿(真島, 1995)と定義される。“自分自身のため”という理由の下で達成行動に従事する自己志向的動機と対比される。日本では、他者からの期待に応えたり、与えられた職務や役割を全うしたりしようとする他者志向的動機が優位であるという指摘もある(東, 1994)。

他者志向的動機のように他者の存在が動機づけに有用に働く理由として伊藤（2010）は以下の2点を指摘する。第1に、自分の行為や努力に対する責任や義務の感覚が生じることである。自分だけの目標であれば、うまくいかないときに目標を変えて基準を下げるのが簡単にできてしまうため、本来の目標に向けた動機づけを維持することは難しい。しかし、自分の行為が他者に直接影響を与えるということになれば、目標を簡単に変えることができないため、動機づけを維持しやすい。第2に、自分の達成に対して、個人的な意味だけでなく、社会的な意味を付与することによって、複数の目標を自分の遂行と結び付け、同時に達成できるような状況が構成されることである。特定の遂行が複数の目的を持ち、複数の意味を持つのであれば、それを達成しようとする動機づけは高まるはずである。1つの達成行動に対して、“自分のため”や“他人のため”という複数の動機づけは統合されるものであり、他者志向的動機づけが高まるのが達成行動に促進的に働くことが十分に考えられる。

ただし、これまで研究されてきた他者志向的動機は、他者からの期待への応答や恩返しの意味合いを強く持ち、いわゆる互惠性に基づいた動機づけであった。しかし、上のようなメカニズムによって他者の存在が動機づけに有効に働くのであれば、そこに、他者からの期待や応援は必ずしも必要ではない。ただ“自分の行動が他者のためにもなる”というだけで、その行動への動機づけは高まるはずである。そこで本研究では、“他者のためにもなる”と意識するか否かのみで、動機づけに違いがみられるかを検討する。

また、他者の存在が達成行動に及ぼす影響に関しては、誰にでも等しく促進的に働くわけではない。他者の存在を意識することにより作業記憶により負荷がかかるようになり、負荷の大きい課題の場合、成績が低下することも示されている（Crouzevialle & Butera, 2013）。また、他者からの期待から生じる義務感や責任感をプレッシャーや重荷に感じてしまう人もおり（伊藤, 2010）、他者の存在や期待がどのような影響を及ぼすかについては、一概にはいえない。したがって、他者の存在や期待が達成行動に及ぼす影響について検討する場合には、その行動や他者の存在・期待、他者との関係性についての個人の志向を考慮する必要がある。

本研究では、自分のためにする達成行動が、“他者のためになる”と思うことにより促進されるか、その影響は個人の特性によって異なるのかについて仮想場面を用いた質問紙実験によって検討することを目的とした。具体的には、アルバイト場面を使用し、アルバイトでの作業量が、“他者のためになる”と思うことによって増大するか否か、作業量の違いは個人の特性と関連するかを検討した。また、本研究では、“他者のためになる”とする行動にはアルバイト代が出ない援助行動と“他者のためになる”とする行動にアルバイト代が出る達成行動とを比較することで、他者の存在が意欲に及ぼす影響を検討した。

方法

参加者

広島県内の大学に通う大学生106名（男性50名、女性55名、不明1名；平均年齢20.73歳、 $SD = 2.36$ ）であった。

質問紙

質問紙は前半と後半に分かれていた。前半では、場面想定法を用いた実験を行った。後半では 3 つの尺度を用い、参加者の特性を測定した。

場面想定法 前半は、アルバイト場면을想定した質問紙実験であった。場面は 1 時間のアルバイトの中で、①折り紙で鶴を折る、②鶴を封筒に入れる、③封筒に宛名ラベルを貼る、④封をして切手を貼る、という 4 つの手順を繰り返す作業であり、1 時間を超過して作業をしてもかまわないという指示を受けたという設定であった。さらに、1 時間の作業の結果、主人公は 30 個の封筒を作り、非常に退屈で疲れたこと、部屋にはまだ大量の折り紙や封筒が積んであるという状況を設定した。この場面において、参加者には仮想場面の主人公になったつもりで、アルバイトの時間が終わった後にどれくらい余分に作業をしようと思うかを回答してもらい、この回答時間を作業時間とした。作業時間として、“0 分（作業しない）”から“60 分”まで 10 分おきの 7 つ、および“それ以上”の計 8 つの選択肢を用意した。“それ以上”の場合には、具体的に何分かを記入してもらった。

アルバイト場面は、超過した作業時間のアルバイト代の有無に関する 2 場面と自分の作業が他者のためになるかに関する 3 場面の組み合わせによって 6 つ用意した。自分の作業が他者のためになるかについては、ベースライン条件、友人伝達条件、友人非伝達条件の 3 場面を用意した。ベースライン条件では、自分の作業量が他者のためになるという情報は提示されなかった。友人伝達条件と友人非伝達条件は他者のためになるという情報が提示される条件であった。具体的には、明日に残りの作業を担当するのは自分の友人であること、友人は日給制で雇われているが残りの作業は何時間かかるかわからないほどの量があることが提示された。友人伝達条件では自分の作った封筒の数が友人に伝わる状況であることを、友人非伝達条件では自分の作った封筒の数は友人に伝わらない状況であることを提示した。

超過した作業時間のアルバイト代（2: バイト代あり、バイト代なし）は参加者間要因とし参加者を無作為に割り当て、他者のためになるか（3: ベースライン、友人伝達、友人非伝達）は参加者内要因とし 1 人の参加者が 3 つの条件について回答するようにした。他者のためになるかの 3 水準の実施順序については、最初にベースライン条件についての回答を求め、友人伝達条件と友人非伝達条件についてはカウンターバランスをとった。

個人特性の測定 参加者の特性を測定するため、以下の 3 つの尺度を用いた。

(1) 親和動機測定尺度。杉浦（2000）の親和動機尺度を用いた。この尺度は、“仲間から浮いているように見られたくない。”などの拒否不安に関する 9 項目と“人と付き合うのが好きだ。”などの親和傾向に関する 9 項目で構成される。“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの 5 件法で回答を求めた。

(2) 個人志向性・社会志向性尺度。伊藤（1993）の尺度を用いた。“自分の個性を活かそうと努めている。”などの個人志向性に関する 8 項目と“人に対して誠実であるよう心がけている。”などの社会志向性に関する 9 項目で構成される。“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの 5 件法で回答を求めた。

(3) 自己・他者志向的動機への態度尺度。伊藤（2007）の尺度を用いた。“「応援してくれる人の

ために頑張る」というのは、それに応えられるという理想の自分になることが目標である”などの他者志向的動機に関する 8 項目，“「他人のために頑張る」というのは、うまくいかない時に申し訳ないと思ってしまう”などの否定的認知に関する 4 項目，および“他人に気持ちを向けるには自分に満足していなければならないと思うので，まず自分のために頑張るようにする”などの自己志向的動機に関する 3 項目で構成される。“当てはまらない”から“当てはまる”までの 4 件法で回答を求めた。

結果

欠損値の処理

106 名の調査対象者のうち，2 名の回答に不備があったため，以降の分析からは除外した。

条件間における作業時間の違い

まず，3 種類の作業時間（ベースライン・友人伝達・友人非伝達）の平均値を算出した。作業時間の算出には，選択肢の値(0~60 分および“それ以上”と回答した場合には記入された時間)をそのまま用いた。

Table 1
各群の作業時間の平均値 (M)，標準偏差 (SD) および分散分析の結果

		F				
		M	SD	アルバイト代	条件	アルバイト代 ×条件
バイト代あり	ベースライン	38.96	36.97	25.88 ***	20.38 ***	0.71
	友人伝達	52.29	41.17			
	友人非伝達	47.50	40.13			
バイト代なし	ベースライン	11.89	18.94			
	友人伝達	24.72	20.15			
	友人非伝達	17.50	17.86			

*** $p < .001$

条件間で作業時間に差があるか検討するため，2（アルバイト代：バイト代あり・バイト代なし）×3（条件：ベースライン・友人伝達・友人非伝達）の 2 要因分散分析を行った（Table 1）。分析には統計ソフト R の ANOVA 君（version 4.72）を用いた。球面性の仮定が満たされなかったため，Huynh-Feldt の ϵ による自由度の調整をした。その結果，条件の主効果 ($F(1.66, 166.29) = 20.38, p < .001$) と群の主効果 ($F(1, 100) = 25.88, p < .001$) が有意であった。条件間の差について検討するため，Keselman-Keselman-Shaffer の統計量と Welch-Satterthwaite の近似自由度を用いて行ったところ，3 条件いずれの間にも有意差がみられ，友人伝達条件で最も作業時間が長く，次いで，非伝達条件，ベースラインの順であった（いずれも $p < .01$ ）。また，バイト代あり条件においてバイト代なし条件よりも作業時間が長かった。アルバイト代と条件の交互作用は有意でなかった ($F(1.66, 166.29) = 0.29, n.s.$)。

各尺度得点と作業時間の関連

条件ごとに7つの下位尺度得点と作業時間の相関係数を算出した。全員、バイト代あり群のみ、バイト代なし群のみで算出した結果を Table 2 に示す。このとき 106 名の調査対象者のうち、友人に伝わる条件で3名の回答に不備があったため、分析から除外した。

その結果、全員において、ベースライン条件と拒否不安 ($r = .24, p < .05$)、ベースライン条件と親和傾向との間に低い正の相関がみられた ($r = .24, p < .05$; $r = .20, p < .05$)。また、ベースライン条件と自己志向的動機、友人非伝達条件と自己志向的動機との間に低い負の相関がみられた ($r = -.20, p < .05$; $r = -.23, p < .05$)。バイト代あり群においては、ベースライン条件と拒否不安との間に低い正の相関がみられた ($r = .30, p < .05$)。

Table 2
バイト代あり群、なし群の下位尺度得点と作業時間との相関係数

	ベースライン条件			友人伝達条件			友人非伝達条件		
	全員	バイト代あり群	バイト代なし群	全員	バイト代あり群	バイト代なし群	全員	バイト代あり群	バイト代なし群
拒否不安	.24 *	.30 *	-.17	.19 †	.18	.01	.16 †	.17	-.09
親和傾向	.20 *	.20	.22	.11	.14	.04	.16	.15	.21
個人志向	-.06	-.05	-.07	-.01	-.03	.02	-.06	-.02	-.13
社会志向	.19	.24 †	.10	.17 †	.20	.11	.11	.17	-.03
他者志向的動機	.14	.23	-.05	.07	.12	-.06	.00	.01	-.12
否定的認知	-.01	-.02	-.02	-.02	-.04	-.07	-.03	-.03	-.08
自己志向的動機	-.20 *	-.23	-.10	-.18 †	-.19	-.08	-.23 *	-.24 †	-.17

注. ベースライン条件と友人非伝達条件(全員: $n = 106$, バイト代あり群: $n = 51$, バイト代なし群: $n = 55$), 友人伝達条件(全員: $n = 103$, バイト代あり群: $n = 48$, バイト代なし群: $n = 55$)

* $p < .05$, † $p < .10$.

考 察

本研究の目的は、アルバイト場面を想定した質問紙実験により“他者のためになる”と意識することでアルバイトの作業量が増大するかを検討することであった。また、その効果と個人の特性との関連を検討した。

“他者のためになる”と意識することの影響

分散分析の結果から、他者のためになると意識することで、作業量は増大することが示された。達成行動が相手に伝わる場合にはもちろんだが、たとえ相手には伝わらない場合にも、達成行動は他者のためになることが言及されないベースライン条件よりも大きくなるという結果であった。この結果は、これまでの達成動機研究や他者志向的動機の研究で指摘されてきたような他者の期待や社会的な評価といった要因だけでなく、他者のためになること自体も、当該の達成行動を増大させることを示唆する。

アルバイト代の有無と他者のためになる条件はそれぞれの主効果が有意であり、交互作用が有意でなかった。この結果は、援助行動においても、達成行動と同様に“他者のためになる”と意識することで当該の行動が促進されることを意味する。バイト代なし群の友人非伝達条件は、アルバイ

ト代が出ず、友人に自分の努力も伝わらない条件であり、援助行動にあたる。バイト代なし群の友人非伝達条件がベースライン条件よりも長い作業時間を示したことは、達成行動や互恵的な関係に限らず“他者のためになる”と意識することが行動を動機づけることを示唆する。

植村（1999）によると、援助行動が生起する理由は、“相手を何とかして助けてあげたいから”という愛他心、“かわいそうだから”という共感、“友達だから、知り合いだから”という親密さの出現頻度が高い。本研究の他者のための行動が増加した結果はは先行研究の結果と一致しているといえる。同じく植村（1999）によると、例え援助しようと思っていなくても、援助を拒否することが難しい場面では相手を助けると考えられるという。友人伝達条件では、自分の作業量が友人に伝わるため友人非伝達条件と比べて援助を断りにくく、作業量に違いがでたのではないかと推測される。

作業時間と個人の特性の関連

次に、“他者のためになる”と意識することで増大する達成行動と個人の特性の関連について考察する。本研究では個人の特性として親和動機、個人志向性・社会志向性、および他者志向的動機について検討した。

まず、親和動機についてであるが、相関分析の結果をみると、親和動機が高い人は“他者のためになる”と意識したときに作業量が増大するという関連がみられている。伊藤（2011）によると、親和欲求は援助行動を予測する特性である。また太田・米澤（2012）によると、向社会的行動は親和欲求と有意な正の相関をもつ。本研究の結果は、これらの研究結果とも整合する結果であったといえよう。

次に、拒否不安についてである。相関分析の結果をみると、一部ではあるが拒否不安が高い人は作業量が増えていた。拒否不安とは、他者からの拒否に対する恐れである（杉浦, 2000）。そして、人は印象の良い自己像を形成するために他者への援助意識を持つことを重視する傾向にあるともいわれている（太田・米澤, 2012）。このことから、拒否不安が高いほど、アルバイト代をもらっているにも関わらず、手伝わないことで誰かに嫌われるのではないかという考えが影響し、作業量が増えたのではないだろうか。

次に、個人志向性・社会志向性についてである。ベースライン条件のバイト代あり群、友人伝達条件において、社会志向性と作業時間との間に低い正の相関がみられた。伊藤（1993）によると、社会志向性とは他者あるいは社会の規範への志向性であり、社会のなかでうまく適応していくための特性である。このことから、社会志向性が高いほど、社会的に望ましい行動をとる傾向があり、また、“友人のためになる”と意識すると、社会的に期待されている行動を取ろうとしやすいのではないかと考えられる。また、内省報告をみると“期待にこたえたいと思うから”という回答があり、他者からの期待にこたえる行動をとろうとするという先行研究に合致する結果も得られた。

一方、個人志向性とは、自分自身の内的基準への志向性であり、自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で自己実現に近い特性を表す（伊藤, 1993）。本研究において、いずれの群、条件下でも、個人志向性と作業時間との間に有意な関連はみられなかった。個人志向性尺度が高くて、“友人のためになる”という意識が作業時間に及ぼす影響とはあまり関連がないと考えられる。

最後に、他者志向的動機への態度によっても、作業時間は異なる。バイト代あり条件となし条件

を併せて全員のデータを用いた相関係数をみると、自己志向的動機の得点とベースライン条件および、友人非伝達条件における作業量の間には低い負の相関が得られた。つまり、自己志向的動機の強い人は、あまり余分な作業をしないと回答したことになる。他者志向的動機とは、他者からの期待や応援に応えようとしたり、与えられた職務や役割を全うしようとする動機づけであるため(東, 1996)、他者志向的動機に肯定的であるほど、“他者のためになる”と意識した際、動機づけが高まりやすいと考えられる。また、伊藤(2007)によると、他者志向的動機への肯定的な態度を示す人は、社会的貢献欲求が高い。一方、他者志向的動機に否定的であったり、自己志向的動機に肯定的であったりする場合は逆に、“他者のためになる”ことが動機づけを高める効果は小さい(伊藤, 2007)。本研究での結果は、他者志向的動機の強さというより自己志向的動機の弱さという観点ではあるが、先行研究と似た結果が得られたといえる。

まとめと今後の展望

本研究の結果から、“他者のためになる”という意識を持つだけで、作業への動機づけが高まることが示唆された。また、その意識が作業時間に与える影響については、一部、個人特性によって異なるといえるだろう。

本研究の限界として、仮想場面を用いたことが挙げられる。本研究で用いた仮想場面では、1時間折鶴を折って封筒に入れるという作業を続けた結果、主人公が非常に退屈で疲れたという状況を設定したが、実際に参加者が体験した場合にどのように感じるか不明確である。他者志向的動機の影響をより明確にするには、同様の場面を実際に参加者が経験したときに、参加者がどのように感じるか、その時に“他者のためになる”と思うことで達成行動が促進されるか検討する必要があるだろう。

引用文献

- 東 洋 (1994). 日本人のしつけと教育——発達の日米比較にもとづいて—— 東京大学出版
- Crouzevalle, M., & Butera, F. (2013). Performance-approach goals deplete working memory and impair cognitive performance. *Journal of Experimental Psychology: General*, **142**, 666-678.
- Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996). Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 461-475.
- 堀野 緑・森 和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.
- 伊藤忠弘 (2004). 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, **8**, 63-89.
- 伊藤忠弘 (2007). 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究——クラスター分析に基づく被験者の分類—— 帝京大学心理学紀要, **11**, 87-102.
- 伊藤忠弘 (2010). 達成動機づけにおける「個人」と「社会」の調整と統合——アスリートのボランティア事例に基づいて—— 学習院大学文学部研究年報, **56**, 181-205.

- 伊藤忠弘 (2011). ボランティア活動の動機の検討 学習院大学文学部研究年報, **58**, 35-55.
- 真島真理 (1995). 学習動機づけと「自己概念」 東洋 (編). 現代のエスプリ 意欲——やる気と生きがい—— (pp. 123-137) 至文堂.
- Murray, H. A. (1938). *Explorations in personality*. Oxford University Press.
- 太田直美・米澤好史 (2012). 大学生の向社会的行動と友人関係及び自己像の形成との関連 和歌山大学教育学部教育実践センター紀要, **22**, 29-39.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- 植村里絵 (1999). 向社会的行動の生起過程に関する探索的研究 名古屋大学教育学部紀要, **46**, 173-185.